東雅
十一

東雅巻之十九

鱗介第十九

龍タツ 旧事紀に海神豊玉姫命の産生に當りてかひし渕の車儀志あらはれて八ぬし大熊鰐の類りともいへり龍となれりて其のあらはしくは爰に是より住まりて又仁徳天皇の御代に吉備中國川

東雅巻之十九

鱗介第十九

龍タツ 旧事記に海神の女豊玉姫命の皇子を
生れ給ひし時の事は書紀には化て八尋
かくて大熊鰐と成りしと見えし御説には龍となりて
事は其説どもを以て書紀には又化為
又上古の御代の事に吉備中國川

皖河流に大乱ありて天寿を被りて死
すりとみ多かりしを笠原縣守水
にぐりありとしく斬死しけれを河水
血をまりぬを取て縣守淵に入て日本
記にみへたり源為抑竜語をタツ
といふ此語はミツチといふ上に詳
此語タツとは起也まだ不昇をいふより
いとあるべき古めは蟠地ともタチとも名そ竜地く

おタツといひハタチといふなる其魂の性をしるしてこそ
されハツチとなるとも水ハツチを流しぬと水流るゝ
かなと流をツチとなりぬる
前段よくいひてあり

鰐

ワニ 天孫海宮より帰りたまひし時海神
一尋(ヒトヒロ)鰐(ハニノ)魚して奉送しぬと旧事紀ニ
見え日本紀ニハよりかゝる旧事紀ニ及神殿
ニ寄むかへの子の女と婚せ産る也八
尋鰐とも訓アリて一尋鰐して奉送る

いともかしこき海神の御女
豊玉姫命天孫の御子生ませし
時八尋大鰐と化りたまひしと日本紀に見え
記にこそ日本紀中に海に大熊鰐とも
あるはまた縁起物に鰐謂てワニといふ
蕃龍なる洋　日本紀にはみえし鰐とのみ
さすれハあるひはこれより古事記
また和名にもこのことありて鰐魚の字を用ひたれ
これらの書にすへて見ゆるなれともいにしへの義か

しれぬ

鯆

鯆イルカ古事記に伊奢神て負ひ知らせ給ひ

し御せし時穢し鼻事乃いまん

武内宿禰志ていつきましゝも淡海と若狭

ともに近江を経のほりて高志前の角鹿(ツヌカ)の行

宮に到りましける其地に伊奢

沙和気大神の命夢に見えて詔ま

し幣帛の毀鼻入鹿の魚一浦に依りし
と天皇神より御食の魚給ひしかさせ
多ひし故にこそ神の御名は御食津大
神と申す今も氣比大神といふ也亦毀
鼻入鹿魚にこそ血臭氣にこそ浦を血浦と
いふ今は都奴賀といふ也とこそ云へり
毀鼻とは此魚の鼻在總上といひしく

藤我世國大臣の子孫入唐といひしと
け物ゑ云ゆゑ危物もあし イルカといふ
蕃云詳傳多紗にて臨海異物志異
名苑注にて鯆䱐イルカ一名い
江豚と云なり　云志和は鄙人乃紙おふ
や角鹿といひ都ね賀といふは
鄙人の敦賀郡なり　古くはよ斗ふイルカと危
つけいひしも何は血臭乃臭といひしなるべし血の
臭細ふて海乃名にもし一イ一物しく都奴賀と
いひし角鹿の志るし無物ゆゑ都留賀といひ

て数ゆゑ志らずし千ノカといふし諸様し一向
イルカと称りしよしなり

鮝　フカ　俗名おすい　鮮魚之所を以て鮝魚とす

フカ今按ニ詳ならず　廣韻ニ云
魚之字文　鯗　乾魚　似鰤　蒼文
赤尾といへり是を海もの也といふ
出海　鰱ニ似てし　鰤ニ似て　鰶鰤との
しとこゑあり　フカの事を詳にして

とこそへし世俗萬葉集の頭小野篁卿て
イサナといへしけれのふとこいろあり
イサレとは即字之を鈹張噫味水族鯨
甚て莫二敷當一者といひし則も十を支波
イ凡魚を呼ひてけといひありきとへい音
人此莫為鯨業といふよそし玉歳おふさ
ハ丁坪鯨名おする康頼を説て捕同録

唯曰鯢とぞあり唐宋よりこのかた
彼俗呼以て海鰌とも海鰍とも
名付鯨也　古語にいさなといひ白鯨をしとといへり同じ物に一名
ありしをいひしとなりクヂラとはクジラと云
語の伝もしらずて此魚は同じ思ふ在唐て
て楯をなりたりとそいひしなり
見へたり

鮫

サメ　俗名ふか又陸詞切韻に鮫は魚皮
有文可以飾刀剣とあり云　サメ

の葉洋の次古語にサといひしを挿(サ)し
小(サ)ササも根の小しきなれはさゝといへるなり

鱸

鱸(スヽキ)大己貴神出雲国多芸
志の小浜にて御饗献
られし時水戸神之孫櫛八玉神鵜と
なりて海底に入り底の埴を咋(クヒ)
大(シホノツ)口尾翼(ハタ)鱸(スヽキ)さわさわに控(ヒキ)依(ヨリ)騰(アゲ)て

はじめし事旧事記古事記等に云
ありてこれよりさきハ素盞嗚命
の事出雲国簸為にし附の事とし
ことは風土記にもみゆ彼あ娶
綱手掛て引来りのひしとて以来
なり掛るなと云世に浮て気を生
し事は掛よりさき好りき河をさるね

記には赤海鯽魚と書し日本記に書
されしわを日本記のおもく一説に
赤鯛とあるをまちしといふ誤てアカダヒ也と
いふ人何れも此物の名を古名はアカメと
いひしを後にはタヒといひしくアカメとい
ひしとアカは即赤くメとは古名魚
數と呼ふメとしけしとわて世し常の

事也唐にハ夕ヒとよミし事ある二鉢
の方ミよあしところなり即今の銀鐔
徒然草にも象を浮くトミといふ遊味象牙
城用図台の下ミといふ事ある波宝のいかしく
夕ヒといひし證乃物也縁あり料食
鐔ハ刀鐔鋼鉄其證無毒鳥鍛鋳而鉄鐔
者也といふ即是也　鋼ハ字仍ハとて象ちとなし
と云鐔の所出ハ廣会ある

以下は語りつたふるの　御名は　語名御食津を
いふなり
記く越奥にりら出黒鯛相似たる魚あり又
立国に海鯽をチヌとして上代より日本紀
を神功皇后角鹿より穴門に赴きしかい
しけに渟田門（スタノト）外に海鯽魚多に船傍よ
聚りけるを大御酒を灌ぎのちは即酔て
浮しぬるを其事とさるべし海鯽魚浮て

夕ヒといふはクチヌ吉即也まゝ此凡古記

ヲ鈷仁と志るせしを今も皆ヲチニダ

ヒといふものゝ人とこし故也

鯔

ナヨシ旧事記ニしとし海鯽を宮古事記

ニ成之魚乃也口女即鯔魚と云詳

日本紀ゆとうによりクチメとも

ナヨシといふ並ニ義ニ詳旧事記ヲ海鯽を

猿乃語を求めしふ

と頼めしれぬ御船のなかに石の多く
うちいだしけれは御経と言ふや
のみならずしてきし縁覚に似たりと覚し
ありけんを縁覚多聞即云不信作不
計縁覚ニ云可レ習ニ不信忍ニ云心しのよしと
今習ニ不信縁覚ニ云縁也と云ふ半作縁にて
ちはるみえさり給ふ故ニ立所とをしく

鏡をミハ一川ヨクチといへる字於傍付て
鍍ニ書説中有名鍛冶名在箇条ケミモチ
といふ此を須し有り紫ニハといへるのは書之
形をいふケミモチハ書ふしき形をいふ
ケミモチといふハ書説中ふ入あるをクチの義
ニ譯　西非ヨ鍍石兒第之一名兒第ふ名鑄文名黄
銅兒混海志名黄豊兵即ふ在兒第也と
ニへ有り鏡を即兒第之内ハ書ふ鑒在第イ
鏡第服中白鑞可作膠とミへ有り此の緩膠を三へ

といふは炙の名にあらしとそ見へ侍る諸名所ハ鵜
飼川ら也しは是又小用しけれとも実なりとものや
取しぬるむ此字邑の此紙に合せ別也へといひ侍り
説文に鮎鰋也爾雅鰋鮎一物と二物なりと
見へん
一説

鮎

鮎ハ神功皇后新羅を征し給はんとて
肥前松浦縣玉島里に到りて御
食しける時四月上旬に當りしに御裳の
縫を抜取りて飯粒を餌として細鱗魚を

詞海のしくメツラシ魚とあるは海ひとしに
去るく云を物色ぞ鮎として云今松浦
と云ふ泥にしたり後は月上旬の時その
女房の緑の採る粧をとて餌をとりて年
魚の詞は年々今に絶えず毎月日数
小さくて古事記又こは同し海の名の
には藤紋ある魚を捕る鐵の魚一名紅魚

和名アユ 漢語抄云 銀口魚 細鱗
魚也 云 崔禹錫食經云 貌似鱒而小
有白皮無鱗 春生夏長 秋衰冬
死 故名年魚也 注見于倭名抄
年魚とあらはされけれは食經にもよまれ
とみえけりアユの字に鮎 倭名抄に鮧魚
の一名 鮎とかりてアユとよむなり 京本に鮎

事をあらはす筆炙の字は本朝の出生な
見えしところあらはし鉗の字を用ゐし事の
縁にや今は詳ならず衛に鉗疑てアユと云もあれど
世にては久しく鉄出の書にも見えし説ありしはにて
又は儀名なるといふ杯のあらき古書にしては生へてし
猶兼水の正しき事を見に閩廣深洞中に物居
炙一名沢月炙一名蚼蟮炙一名深鰻也といへり
廣志云而の志はきに宏洋也春初時生長
一寸九月後下盈一尺許斯聞際等則黒脊
而形於鰍水中有之しは岩氏か美氏夏秋
無類ありとしは類すて出雲なり岩氏鎔小似て小
しきやといひしを湖に似り去し皮に鱗というべ
あるは紀の鮎といふは楊氏蚼蟮炙といひしかはるに
谷の法様めく何しくあはしも於けるるあら

所り倫るい梅氏か說ふ見れとも原山志ふ一名細穰矣
とミへしもミとも圓身なるふ
祝ふ名しミ名ともなりや

雞

サケ鶏名物ヿ食經をハく鷄子サケモ子
似る毎又赤光一名年魚走生年中取尽
と今桜鶏肉鷄肉非取り鍾い雛鶏矣
一名也毎子い昂霞絕やとゟせりサケ乃
蕃と洋球をりふ東北の方宗ふ出りと

枚の葉に金も銀もて書　梵書　此方の半紙四ツ折にしたるほど
てらしもの也　その世乃人はしるまいそう　海より
船を出して東にわたりて渡りて天竺乃界に行たり
梵を知ら　韻はしらずいふ其国語にて一しきて
唐字をしく志高也　而此語をよく伺ふに
こそ也渡水にいふてスの星ありやと問しに寔然ハ
サルムといふもの所是ここ天竺の天ス不似たりと
いふ気に陽気あるやと問しに小西方ニまゐ
彼等にありしこそサルムに似たりその外は志ら
しぬれと名付きよしこそ此本の西東に
の地方にのこ出ぬるに南して見海邦有
ありてし此の物は甘し東に鹹塩此所に産し
いまその外にありけり候川西山東遠隔
乃ちよきは志て乃地の地方ニ弘へし

かきしれる所にこそねの名をさゝぬ故に
おやむつまじくあらず
すなはち七巻合綴してス一名
赤矣小雅集所に雜紙錦前にある
アメ漢の物なり此銘なりといへとも一冊小口銘
とりかへる今残る文未詳所也
ゆゑに同じ銘の数おほくなるのアメ
にいふてその漢北にまうけるのく

鮒魚フナ倭名抄に和名也字鏡に云鯽魚

一名鮒魚フナといふと注せり義に詳

萬葉集には古実語てフナといふ萬葉に詳

漢語抄乾魚をコツラといひ鯽一名鮒字魚と

いへるをセヒといひ今は俗鮒字鮒字と注せし

渕によりし鮒魚をフナといひしとあるの説也

訓と名付ひしとこそあり凡これらの説を

漢字渉りし後更に字を充用ゐしとわかる

和名乃古よりいひし和の名をかりしもの

とこそへきなり

堅魚カツヲ倭名抄に漢語抄を引て鰹を

カツラ 式文用黒臭字と假せり

カツラ 此は即黒臭なり 黒肉を蝦(カク)して

腊とすとといへなり 鰹の用ひしけれと

なれたる譯 尓雅にはなる小鰹大鯛ともく あり されは 鰹を此りやツメ

ウナキといへるのたなれとも 是も字 異小作む

て甚小して黒臭といへる字乃みえ 新れハ備用

いはく カツヲと も かぞこれ山洲にはあんく

讃州にては カツホ ともいふ やいひ なりけむ 閑書り

こへし 馬鮫臭 鋭口圓身而長青斑色無鱗有

膓 又一種名潤標 一種名青貫と志尓せり 并なれ

朱氏馬鮫魚を即サハラといふよしなりといひ
なり今俗サハラといひサコシといひメジカ
といふてグロといふその俗名あり皆これ鰆なり
ありサハラといふものをこれ形狭而長くして
サハラといふなりサハラとはその腹の狭きなりサハラ
の小なるはサコシといふなりその腰の狭きやメジカとは
てグロといふものの小しきをいふなり三河のその
遠江駿河の漁者秋間にしてはじめてクロといふもの
其腹の黒き故なりメヂカとは其腹の色青くしてカツヲを
メヂカなり似て其身サハラの如く腹に近き所は
青條ありて横條あり要すことし閩書に
一種色黯腹なるものをこれメヂカてクロといふもの
ありて一種花青黒しあらはして小カツヲといふ帰
そのさしくるかや此小カツヲといふ類のくはしきとし

鯖

アヲサハ倭名抄に食經を引て鯖アヲサハ

サバ味鹹無毒其背青色也とせり

サハの名義古語に多く聚るを謂てサハ

といふの類なり多なりといふべし然

るに漢に唐韻に鯖魚煮雜肴在畿内

出行ノ介前なりといふは漢語抄ホカセ

サバといふ御饌鯖今俗乃新婦見之

着ニ錫青也と見えるイミデとあり即頭に位
セチヽカフリは即其状の名なるべくカラカコは即
頭子錫を云べく 錫読てカコ也とすべきなり
雛ハ雛雛子を訓ぬ 国書の名和名の数譲と稱
名なるべきものと云へ 雛子読ぬ條名稱ま
ミてし語イ字無国何ゆ何故に或は俗名と
志ふぬイミフとすヽカブリカラアされとしつのも
即今カビカスホホリハゼ
あらいやなのあれどもなり
鯱ハ仏像名稱文字語ありて鰻名ハ仏今作

鱧字ニ此字ありハ公の義ニ詳且今俗ニ
ヤツメウナギといふハ漢人の説ノ
鱧魚頭似蝮蛇也と明有利　李東璧ノ説也
古の俗蝮蛇とよひしハことに蝮ハこと也
ハ公此ハ蝮も此説也ハ公此説ニ甚那の他ニ
此以しハよみへありて鱧魚ニ頭有ニ
七竅如七星ともいへり　載開ノ説　ヤツメとは

こゝ服紙合せて八ツの轂あるといへり
神経轂とは火といふ物半前に作りあり
らすきとはこゝ鐙鑣に似たるもの今俗にハモと
いふものなりこれ小あるへし即ち鐙くハモといふ
漢書にてはちかつよりしなり　常水の朱氏
ハモとは鐙く鐙鑣とし　鞆鐙としいふへし
なり○係る所なる　鐙金をムナキといひ　鐙鑣金を
ハミカミノイツといひしはいにしへ和名雑部灃に
鐙太宰也と見へ毛詩注疏又同しものかた七二三

有王餘魚 昔越王作鱠不盡餘棄
水因以半身為魚故曰王餘魚之カラエヒ
といへり 然にカレヒといふは俗也東雅ニ
比目魚といひ謂之鰈と云しその郷今俗
[illegible]大なるをヒラメといひ小なるをカレイといふ
鰈也 東雅ニ東方有比目魚不比不行其名謂
之鰈と云し但鰈細葉為一服
両片相合乃得行今水中所在有之以示海浮生
餘魚とこゝへ...東雅...

并京師江戸にて此魚王餘魚をかれいとよみ
備し字通の説にいふ 傍に目して其字縁よ
きよし 伴婦のみ目にしてひれとなくへいれとの
鰈といふの名ハ本草にて通用したりといふ
なくなはなれ是歌詠ぬして鰈如く小魚ハ
鰈魚真一魚にて是称しその鰈魚也亦ある両目お
なりしくあり比目かたいし即ちこ是目魚二鯽
なりとふかしれ鰈魚卿に今按州譜曰日本鰈
なりみつて名錄に其をかたれは鰈魚をまた
ありこそ鰈ありとみへたり一名鰈の王餘
魚とよふことハ本草綱目にそへて御経
時の鰈也てもせんとへのかれた鰈也
しいく王餘魚といへしや縁人鰈按渊にある
鰈魚比よれとの鰈の鰈粥の名ありなりく

庭見れとこそ世には腹黒き者の時に諸あ
ふきのあり白きひり思慈の文あれともありその数
も侍らは
多かり

鰯

イハシ 倭名抄に漢語抄を引て鰯をイワシと
鰛はヒシコイワシといふ今按鰯字未詳
とあり 漢語抄に鰛魚 鰮に作れり
例によりて鰯魚鰯字 亦鰯に作れるにて
志るへし さて次イワシとは弱(よわし)之義にて離れは

鮊魚ミロソ　倭名抄ニ文字集略を引て鮊魚

頭尾白色也漢語抄ニミロソと云と見えたり

廣雅ニいふ所の鮊は鱎にて似たる説も有るを

此所の間ぬる所は不義なる漢語抄ニ云る所乃

ミロソも是又漢語抄なるに本は鰤鱵

魚か似たるにはしきか後にとりたる所の名

今ミロソといふものは似たるもの也又去来切

韻をいへは錫をコホリイシ小鼎といふ
御鉛鼎也サ 一二寸斗也今按に水
鼎是や如何也を云に作りイサヽよぶ
其の影也シロシとは白鼎也コホリイシ
とは水鼎也イサヽとよふは凝結の如く
サヽレ小石之 鉛鼎ハ長さ七尺の其の影より
出入りいふシロリ物をしとはゝ
其部にてシロイソとゝく礦結水に向け生
するもの也 大物は其の脇 鍋に写すとはなりてす

鱵

針魚をハリヲ一州にヨロヅといふ口長く
寸如針故以名之と見えたり ハリヲとは
即針魚之ヨロヅの義に詳 即今サヨリ
といふものの如く 篇小集成サヨリ又鱵魚
一名針嘴魚といふものゝ如くと
いへり 神武天皇御歌にクチフサヨリといふ
事を記し 鏑矢の如く集にはりといふ亀
ヨりもサヨリといふもその 多紀(サハヨリ)為之ヨロヅとい
もと沢には萬於多くべし

鰕

エビ 鰕魚名七色 合類を以て 鰕はエビ

海嵐ニ天孫日向まて降臨ありし初天御世命
おもくに錺屋の錺樓なと追ゝ衰へて
太神の御子に仕奉りやと向ひて諸氏ハ
皆仕奉りもともに中にも中に御職ととも
掛りしハ世は口ゝ其さらし口ととひて
細小刀とぞとてさらに成る掛りて祭ゟ今ニ至る
御職晴ニ掛艹り取ともに事旧事記古事記

すは見へ侍りしをコと怠候ハしに
心得ぬことを詳すれハ使者ハ倉卒
とりて御気色極而太甚やコとふ古式
ニ聲高かりてイりコとに姆漢朝ハま
哀御気色ハやとハふ然れハ従鎮のまゝと
固本とらせりハやとて謹みしハ
遠安訓蒙図彙りて御學をうけ十六コとりきハ
御奥をイりコとい心あ水御に御覧御蘇逢有を

されば海漂の字読てクラゲナスタヾヨヘル
といふ此半古事記より古語なりクラゲ
ナスといひしを海漂の点ばかしくさう
ハ浮脂をなづけてクラゲといひしとを承
ようて海漂ひめるはいひしとこゝにあり
備忘録には食鑑をいて海月一名水
母クラゲ白皮紙月在海中故以名とかく

海もり　倭名抄クラゲは海蛇一名海蜇と
いふものなり海月とはあるともいへり
本艸綱目に海蛇南人以為海錯並啖之
閩人曰鮀廣人曰水母異苑名石鏡とあり
水母緣一名石蛇海䖳なり水母とも
即此クラゲといふ物也閩書に海月海
蜇類なり一名蠔鏡形圓如月亦謂海鏡土人鋸
以為天窓ともしとあるこれらともいふと
ミヤクミカミといふ物なりミヤクミとは陰ふ物なりと
の如くにて縄の如く天窓ともいひし物なりとぞ
今此ことは水母海月名別なりしといへど食用は
よろ時は古の時よりは水母一以て海月といひし
物也
の

太古ハ蒼頡鳥跡を見て鐵廣如鐵樽如きものハ
しるしみへ古き文の有しく十色ひとつのかり
急乃字ハ謡く十色のひとふ即傍之を白
いゆの山と緑を入るかべへハ世海波の調ハ文届
してうといふゆを悦ひて篇紙集稿ふく
へなりすとひし事廣く見と業のふ
さそとて見ゆく見ちんの業をも聞して十を

いにしへより謂ありて今は詳ならずと
いはるゝ耕地の田をいふと今は野鋳の方言
急須とて急須なり近頃はまことに
事あり萬葉集抄などいへるにも其
證ありとなむいへるものありその説乃
されどはまた今めかしくさまに
或はこれ梵語よりいでたりとあるもの

御ことは楚辞に諱とも書り漢にも主

韓にも称し給ふことも有之元号の

これあり上世には諱ひとしき御名也

御諱にて一夕ことにて楚辞にありまた

楚王に愛従姫といふ婦あり漢には鄭袖と称せし

これらの類也

見えたり

亀 カメ 日本紀私記に亀姫とかいて天香山の

亀比女命下照姫ともかく天津神の御女

御前ニ而諸事相勤今日ニ而是候由

戸を江戸へ命じて申出れ御座候由

事ニ御座候之其ノ儒名被下候

亀の字ニ而カメとハ申ハカメとは

カことハ申候の折ニ而其後儒名被仰候

漢語被遊と訓して亀と読てうミカメとハ

西洋画余被呉候事ニ御座ハ訓して亀龜

はシホカメ大亀也 摂亀一名陸亀はコガメ
小亀也 秦亀一名蟕蠵はイシガメ 山中
亀也 蟕蠵はカハガメ 蟕字彙作蟕と
見えたり 亀をカメといへるは 凡そ甲殻
ある物の總名にて カといへり
甲は読てカハラといひ 殻を読てカラといふ 又
甲字をカブトとよむ 韓紀の古書に 即今も蟹
の古書にのみいふ うにとある 海老の古語の
あるべし
蟹カニ 古語 挌書に 来歴 海浜の 海濱

されたりしけれ掃守連(カニモリノムラジ)遠祖天
忍人命箒以侍り蟹を掃ひてより
て鋪設を掌るをもて蟹守(カニモリ)といふ今俗謂
掃守部訛しにやとおもへりカニの義
ハ埤雅名物を見るに蟹はカニ漢名なり
蟛蜞も海濱稲蟹也蟛蜞ハ葦
原蟹といふ故に蟹をもイニカニといふも同

きり　カニとかくひしと殻(カラ)ある物の事とこそあり二と
またあさ流行毒なるはいはし流之或をつくりとも有
あふこそ殻の毒ことはりとしと志ある物らし萬葉集に
作る蟹と物の毒を去るくはしと志は白蟹なりと
いふ事なり萬葉集蟹とは此ことのいふ事ありて指
春蟹とこいふとこいふやわ事にんいまこと志らし

甲贏　ツビ

石陰子　カセ

紫螺子　サゞヱ　繚名抄甲螺の原小　贏螺　字曰　本草

もりてく　白魚似　辛螺而中有甲蓋　蓋上

錯似鮫魚皮者也漢語抄に海螺をば
ツビといふ海このふへ石陰子乃須々比と和名と
訓く其物生海中形精故以名之漢語
抄に甲螺をコゼ(カセ)といふみえたり海に食
經にいふ栄螺子サザエ細蟹而圓者
やとみえたり此字もこれにて甲
螺とは漢語抄に海螺とかいてツビと

いは濁點を不添して甲螺と讀へし
てカセ此字は栄螺子を俗に別よサヾエと
いふ是にとこそ記して數多して其數
乃本ふよりて名を俗に別は
こゝに合ぬる別物ともなべし
或章甲螺角盈の傳イより不印以前のサヾイなり
不隠して濁なる甲螺と御しぬれと不和と御む印
今は物サヾイの數なりサヾイの數　數千巻角は不
なりけるとなりなりてきとなりなりしてなるあるの

螺まくれたるをいふなり　へ字は其転イよりて　ツビとも
いひカセとは　サザエを云ふなり　又其ツビとい
ふを今俗に田螺をタツボといふなり　是をといふへのと
ことはタツビといひしをよめり　ツビとツホはかよへる
時にすりなれば　壺螺の転をツボといふなるべし　こゝに宇蘿
ふなりとて　かふらしなり　カセとは凡て甚螺カとい
ひしをカラなりカラとは甲殻なるをいひしなりせて
与之礼ば也なるがあらく　古須イ名をはことといひせ
むかふ時須なりを殻のあるのふとくなるともなる
しサエとはサゝを小而小也エとは　イへなり　螺牟の
殻はカクツブリノイへといひし　蝸牛の事をタモノ井とし
いふことくを殻のふしきなれはいふなるなる今の
コサヒとふとのとこへなり　泥馬余の説イアツビ
サタツカカセと云し　サタツカなる　螺をサダへといふて

サザイの事ならしと称須字を云ことそり訓ハ
カゼとはツホサザイなりと
いふものなりや
まつき

龜蹄子也緑名雑小須之崖隹屬渇食練小

龜蹄子也白似大蹄而附之石生之葉名

苑泥云石華二三月皆紫小鄉山花附石而生

按江淹之と泥云り七の気ゟ洋 小石附生 [illegible]

南海中有之蟀蝑之屬形如龜脚亦有爪狀殼

如蟹螯其色紫可食郭璞江賦云石蜐應節而揚

花に飛りとて通ひしとの飛り年代は人の名御
ふれやとらぬを中すて此ぬかかり出しまして
鐘の中に形のてくかゝひし音こえやセとは云る
所て出すまる蕪形七第ふ絡し也

小螺子したゞみ　神武天皇御製の来目歌に
伊勢の海の大石に八ひ匍經ろふ小螺子の
謂ませかしたりこと卽名くたゞみとは
云り魚をしらぬりふとみえたり　日本紀私記
崔禹錫食經云ふて貌似甲螺而細小口有白

王ハ蓋也漢語ニ拘る細螺ハ多ゝことい
ふと注せり
河貝子ハ十隠名拘る今俗ニとゝしゝ河貝
子殺も悪ニ捷而ぬ人牙ニ害也俗用ニ
蜷字ニ非也と注せり且十の巻詳なり
亦本草綱目ニ寄居子ハ魚躰蝸牛之
如ニ十といふ俗假用ニ蟹蜷字ニ充

ちりカミナとはちれハらカミニナ也

貝その類乃蟹に似たる螺ハ殻中

小寄居かに之是に従りカフナともや

ドカリありともいふ説也　損軒の説ニナとは水邊

水中ニいりて居るをいふといへり従ふへし以

云巻ハ終ひ如家とこそ蜷字借用にてミナと

以て小螺螄纏綿といふものゝ如く小殻ハ巻纏

しぬとき形なるよりいふといへり蓋其草

寄居虫在螺殻間非螺也

海蛤多被其寄

靈螺ヲウニト名付ルハ本草綱目ニ靈螺子魚似橘而圓其甲紫色生芒角若好リ漢語ニ如リ棘甲螺ともウニと縁せり閩書ニよ海膽殻圓如盂外密洽刺剛有膏黄色土人以為醤といふ即此ウニといひしは海之ニヲ膽之井といひことには約轉之略し

国字海膽

俗にカブトカヒと云ふ亦類之とす又有石蟷形圓色紫有刺人觸之則刺動搖疑即海膽而異其名とこれ海膽の物二種あるにや海膽古印ニはウニとの音を轉ともいふの稱ひ一種ウニ乃臣とし其形粟殼の如き者の名をも其刺と搖して擬し得きんとする物の名も是と有るとし其死して殼損れ刺脱落し種と繞なり細小きなるこれを星胃といふとの出しれは俗
カブトカヒと云ふ石蟷のいふ
この物なり

大辛螺カキ

小辛螺ニシ倭名抄に七巻亀貝類として
大辛螺オホアキ漢語抄云成並に蓼螺
一云赤口螺の假名小辛螺はニシ漢語抄に
に蓼螺子に假名を附たり並に詳なり也
古語にアといひしは大アキとはその大きなるをいふ
ことは赤貝やこことはその殻の赤きといふ事也
海にかといひきどいふた鴨になりアキとはその大殻
赤きといふや白蛤は蛤並にウキきといふきは殻(カラ)と
田中螺タツビ倭名抄に拾遺本草に

田中螺をタツビと須ちりし俗にタツホとしタニしといふは即田螺也

蚶キサ字亦作蚶古事記に大己貴神の兄しめまし焼れ死しのひしかは母神乃命かひして蚶（キサ）貝姫命伎（キ）佐（サ）宜（キ）集て蛤（ウム）貝（キ）姫（ヒメ）命持来て乳汁を塗しかは麗壮丈夫に成りてあひしけるとぞ蚶貝姫と

加事記由しこのこと
兄へをれと謂字ほり
合せ物をといひし之
とえへるは古事記下
文へし布するにある之
了きて　蛆る蜉蕃状如蛤圓而厚作有
理推撲印し鋪なりと注せりキサとは
殻上に刻めるあやをいひし
　　　　　　　　　　　　大して
とえへ舟り　我古乃謂凡物の文理ある
をはキサといひなり　前の象も
　　　　　　　　　　　注に詳之
　　　　　　　　　　　　　　日印しし謂なり

アカヾヒといふものゝこゝろハアカヾヒとは

其肉赤きをといへるなり　蚶貝姫とは蚶なり　蛤貝姫とは蛤なり

この本草毒湯火傷を治する事とあるは

俗のいひつたへしかたのことくしなり鎮火之

説なるに蚶は大小之別ありても大なるもの

嬌海赤あまた蚶ノ大者經四寸背上溝文似瓦屋之

壟といふもの魁蛤俗にいはる大蚶字と云即此なり

アカガヒといふ是を小なるものとは蚶は俗に小蚶

そといふ俗はサルバウといふものこれなりさるは小さき

ことキカといひしところなり

蚶蛤ハてクリ倭名抄兼名苑をとして蚶蛤

はハマクリ一名合漿と称す東璧か
かくいへる蚌と蛤と同類而異形長者
通曰蚌円者通曰蛤と云へり此書に
してハマグリといひしは其形円なれ
もあれ長かるもありて海濱の
泥の間に住める事なく石の地中に住める
はとくなれハハマグリといひしならバ蚌蛤

二字を合せて読てハマグリとは称く
るく即ち蒼蛤の事にハマグリとも
ハ古義とは異なる　石をクリと云事前の條に見ゆ

海蛤（ウムキ）景行天皇東国に巡幸ましく
て上総国の海より淡水門を渡ましく
時に膳臣遠祖名磐鹿（イハカ）六鴈（ムツカリ）白蛤（ウムキ）を得
仍て膾と為して進らせまつりて

膳大伴部之姓賜ひし事日本紀景行
姓氏録には白蛤あるは大蛤とし之有
並よ読てウムキとしるすウムキとは海蛤と
いふことし倭名抄には本草にいはく
海蛤一名魁蛤ウムキノカヒと注せり竊
此説のことくはいかにもあるへき魁蛤を
即爾雅に魁陸其注に今之蚶(キサ)としぬ

宝のゆとかんしるしけりとよみたり此もヒアコヤノカ
ヒといふて其殻の内てクリといふより出て甚き珠
は有しゆゑ名を畔といひしもの
なるべしとぞおもへきり

紫貝ウミノクホカヒ倭名抄に紫貝と云く
紫貝一名大貝ウミノクホカヒと注せり
毛詩疏に紫貝質白如玉紫點為文と
あるをもて思ふにしたがへばタカラカイまたはコヤスカヒ
なりといへり此ウミノクボカヒ倭名抄にいへる

詳ならず凡その文馬とよみていよゝ入しは蘇於
馬といひけりけりのをとるといふハ貢
大貝の謂なるや タカラとは甚稀有満間ある思ひし中の
寶か形をといひしる似たり

鰒 アハヒ 倭名抄に四声字苑鰒似蛤
一偏著石 鮑一名鰒 和名アハヒ
食経 小石決明 和名アハヒしと云へるあり
アハビといふ鮑とし ふ並に云詳 本草に石決明
一名鰒魚とぞ 図経ある鰒 異決明相近し 決明殻如手
小者如両三指とぞ云へ 本草ある は石決明形長如小蜂而

みちはれ気ハしけれく物実なるよし俗説としかれ
に後の銘を残もし事ともありて後の人鈍けれ跡で
アハビと称して今ハ海さ倭名抄に見えし示よ
とぞ見へ玄沙

蠣カキ倭名抄に字苑をひく蠣は
カキ相着虫殻似石之と注せり第ふ
詳カキとは其殻カラ相アヒ着ツキしと
いふ心しがはとく

已上鱗女

東雅巻之二十

蟲豸第二十

蟲 ムシ 古事記に上古の時事はしるせし所

ウジタカレとゝろきて見えたり 倭名抄 蛆よムシと云

むしりは蟲を呼て云詞也ムとウとは同韻相通すれ

ばムシとウジと云ウは蟲韻なれ蟲韻なりつき

ウジワクとも云へりと釋せり後代に及びぬムシ

しそゑへきはと按古れ神成蟲の名なれは成へし
始りて其義しきる頃はくききへくるさ

蚕 カヒコ 葦原中國の保食神月夜見の尊に殺
されて其頭に桑蚕と化りしと見へたり其義
まれ蚕織の源に見へ侍り

蠅 ハヘ 日神天石窟にこもり給ひし時萬神の声
如五月蠅 サハヘナス 聲とはなすは四月の紀にも見へしと書紀の八

楔蠅此説に出せり又旧事紀天孫木株(コノモト)の
し垣(カキ)葉に夏蝿(ナツヨク)声(モノイフ)根は蟏蛸(コヤクホタル)火の如く耀の
喧響(ホヘヨトヽ)の書に如に五月蝿(ヘノ)而沸き騰しとされ
旧事紀並に此事を記せられたるは今の家
なに詳僂先に述る蝿は八重鄙出蝿は八
つ蝿子の蒼名を花に云物蝿一名大蝿は君称大
君之少し頃もし君しこしイスハヘと云之尓称集に

以上蝘一名守宮はウリバヘ食ル葉ありと伝へり
凡そ虫の名をいふにいはゞもしよ蛭とハチといひ蜥蜴とハア
をとりてとれ法は聞ゆ古事記ふよつんへし小字ハハ虫
紀其義ゆゑかくあて
いひし名似たり

蛇

ヲロチ 素戔烏神の斬たまひし八岐大蛇の如き紀
みえて大蛇の字を用ひられしが古事記にハ遠
呂智とあてられし 古語拾遺にハ古語大蛇謂之羽ハ
羽々といへり倭名鈔に蛇ハ倍美一訓にクチ

十八と以て曰由紀和紀ヲ云ニ口千と以て蟇ヲ
古事記ニ源て多千と以て條名所ヲ云ハ係蛾
呼蝕為ニ反宮昇ニ甚言斤魔也須甚ヲさし八十ヲ又
白ハバとい以ひ蟆示ヲ口千也しいれしと又源ヲ云へと
ヒトへヒ阻云しえ甚へととひへヒ也云しを 蟇と
へとて
又鼻也と以て云ヲ事くし甚ヲ言ヲ蝸しして呼ひ又
クチナハとよひしこへ甚へ援とハてとよひしも示

蟒ハ蛇ノ最大也とあれは蟒蛇をヤマカヽチと
いふはヤマは山之カヽチ也又古事記に八
岐大蛇眼如赤酸醤とあるも此事也 赤酸醤は前文注せり
蜈蚣ムカテ大己貴神云文神書に載る御許に集
至るに蛇の室に寝しめ給ひ明る日の夜は呉公ムカテと蜂との
室に入れしめ又蛇と風とをしめ給ひ呉公蜂の比禮
呉公多かりしと云事同書に見えたれは呉公なるへし

ムカデの義は不詳係名此虫の兼名なるにて
蜈蚣一名蝍蛆一名百足ムカデ之と傳又和名をと
て馬陸一名百足アヒビコと傳し即ヒサムしといへア
ヘヒロの義も不詳和名要集など古語にムカとしてしそムカ
フといへとくしはムカデとも向股など
いひしかし其年毎に細色ひくあるなれとしかる其アヒビコ
とぬるにひひつれし気と此へぬれとも其縁とぞ此へ皆ヒサムしとい
其形の両々ミサに
似しとぞいふべし

丹九 ヒウミ

蚕ノこ

蚋タこ

衣魚ニ云ニ素戔烏神大己貴神をして頭の虱をとらしませし事見へたりしらミの義は不詳倭名抄ニ

説文ニ云蟣キサヽ虱子也虱シラミ齧人虫也と

有りキサヽはりし太陽図比ニ云と見へたり

しらといふは其白色なることを古語に素ことをと呼ひし也

白て齧虫咋可苦物之虱をしらみといひ蚤をのみといひ衣魚

をアムと添し あひきり傳へ侍るを説文に
て哉アブ蝱へ飛虫也と注せり古語にアムといひ
し後時にてアブと云なりへせり其義ハ不詳
哉て蜂哉木哉虎哉牛哉木の部にアムとてアブといふ義説の
阿ムとてこふいふ説の時きしみしこれを蝱字に云しあり
後り侍じてアブといふ事ハ前の注をしぶといふ事の
尤はけ物よりてやいひけん

蜂

八千矛或鳥神大己貴神と蜂室に寝しめ給
とあるを前にみへしもの海鏡達日云へ

天孫ニハし初尓高木神孫校のし神宮の

其尓蜘蛛は孔ありて穴とす方言尓其の号

当りて其は孔木此宮けらし神武天皇に到

はし名のとに四すほ名人此り後紀の統文尓

雅言云字此須とりて蜘蛛八八千蛛之

大蜘ユスル八千大蜘の在地中作穴者之本体也

ミカハ千黒蜘在土為孔又有室者之蜘蛛也

蠧ノムシ 倭名類聚抄ニ 蠧ノムシ 木中
蟲之名也 桃蠧ハモヽノムシ 食桃樹蟲之名
セリ義ハ詳 古語ニ芒刃トヽヒノ虫トいひし事前後ニ
之ナリ 甚 其ト 蠧ハ 芒刃の物ニ
[illegible]
[illegible]
地膽 ニハツヽ 倭名類聚抄ニ 地膽 一名芫菁
ニハツヽ之中 諸書ニ合 俗呼シ ニハムシとし 斑猫
ところ ニ 云ハ ニハツヽとは ニハは 此地ニて

ともいへは神之甚毒氣形ふ似畏れていふ之
云ふことはその地に穴して出るといふ之斑猫とい
或甚一名之ともいするよしなる也 のある 前に注え

蜘

蛛クモ義ふ律日向国風土記ニ初天孫高千穂
二上の峯ニて降ります時ニ風土蜘蛛あり
又は事みへて国史ニも神武天皇紀ニ土蜘蛛と
いふもの事あれてゆりはさ小甚事りきれ

とたはの國をはりてハチクモといひしなれば

國神といへるぬし其の名なる家てよびしなるべし

はされば高く穂の字を二上(フタカミ)といひし二上とハ

即彼兄弟二神の義とみえたり前にもいへる古語なクモやいひし

タカミといふ語の轉せしなくクモといひし亦クモの轉なりけむ。後なり。史書撰述乃

時に至りてハチクモといひし穢の土蜘蛛といふ

如何しまれたる甚字を借りて書なされし亦

此方之此物の旧名サヽカニと云りされば上世
よりいひつぎし事とや謂ぬれば後々韓
地の方言よりてクモと云ふるを此物を
通じしことは訳館の絡物は此物と伴ひ
てクモと云也或云昔三韓の勝房しまひしも
時彼国の絡我国の御習ひし和の様しと
連ノリしも去るへしりん蔘て白生ぬる云通ぜ

附之

蜻蛉カゲロフ古ハ蜻蛉とてアキツ虫といひけり我国をハ
秋津洲とよぶ国柄此虫ハ殊に多き故なるべし
倭名鈔にも蜻蛉ハ蜻蛉一名胡黎カケロウ
又崔豹古今注にも胡黎一名胡離となキエハ
蜻蛉の小而赤之色にて是を古ハアキツ
といひ後ハカゲロフ虫又即ち俗ニトンボウと

さの古の時にカケロフといひしはこれなるへし蜻蛉ニ其状
似竹也とミえし書物也

促織ハタヲリメ

蜻蛚コホロキ

蟋蟀キリ〻ス倭名抄にみえし古のこほろき今のきり〻すハ本
の俗方俗の言相混して別に難り漢人の説に
よりて傳へこれを聞ふかわかり倭名抄にハ兼名苑
次いて俗譯一名促織ハタヲリメ鳴声如急織機

故以足之蟋蟀一名蛬きり〳〵スと云文字集略の
蜻蛚をコホロギといへるしきりに称す京乃
ては名を蟋蟀一名蛬即促織俗に名蜻蛚といふ
またこの虫を一物なれと方俗に随ひて其名同し
ある事をみへたり 陸璣詩疏等詩經通雅正字通皆同 されと京
ことにハタヲリメコホロキキリ〳〵スマツムシスゝムシなと
いふものあれと其数多けれとも其種に異

從て明人の説あるを傳ふこれ一物也といふを
其名を今へ改めて呼ぶ事有之 觀亭翻詩 注説約了 先達の
言に漢字を挑す俗語を變之ましひしいかなる
事なきにあらずといひて我等にいふ事
はきく其名は正しくすべき事也 古本はハタオリメに
いふものあるべし 俗にきりぎりすといふ是也 古本コホ
ロギといふものあるべし 俗にイトヽ也 是これ是古説

きりぎりすといひしもの也今俗にコホロギといふ此
之を漢字にあてしに其名所可疑者ハ毛詩
にみえし蟋蟀也爾雅にもきりぎりすとして蛩之
促織之蜻蛚之皆一物にして古にコホロギといひ今
はイトヾといふ此ものゝ毛詩にみえし螽斯陸璣疏
に蝗の類也長而青長角長股股以鳴者也
或謂似蝗而小斑黒其股似瑇瑁叉五月中以

両股ニ相切テ作ル声ヲ以数十歩とほくきこゆハタハタメく
いなごはなたきりぎりすといふ古にきりぎりすと
いひしは今コホロギといふものなり此毛詩
にいへる蟋蟀頗似蝗而有青褐両種と
云其青形なるものをはたはたと云○螽斯也其褐形なるも
のなる此はいふ蟋蟀之詳義並ニ少深 陸璣詩疏有 蟋蟀似蝗而
小有光澤如漆有角翅一名蛬一名蜻蛚楚人謂之王孫幽
州人謂趣織督促之言也里語曰趣織鳴嬾婦驚也とみへしなり

之虫頭ありて木をも甚害の大なるとやいひ

ぬるを又其訛の衆にやいひぬるを字にはイ子ム

しせ共稲を害をなせハいふにしも也

螽蚚　イ子ツキコヽロ

蚱蜢　イナコヽロ

螇蚸　ハタハタ　倭名鈔にいなごまろとあれとも兼名苑に螽

蚸一名蚣蝑一名蠜螽春黍　漢語抄には春黍須

てイ子ツキコヽロといふ本草に以て蚱蜢をイナゴト
口負似螇蚸而色小蒼在田野間者之螇蚸をハタ
ハタ負似蚱蜢而長細色黄飛時作声在荒田
野者之と注せりこれも注せしものゝ如く相混し
て別ち難けりされはイ子ツキコヽロといへるもの名即
しるゝのイナゴと云螽之古名イナコヽロ也といへる
名即ちいふしヤウリヤウムしといふ此之古にハタハタと

いひしをなしこを酒にハタハタといふ是其イナツキ
コヽロと云ものは爾雅の阜螽蠜といへるもの蝗也イ
ナコヽロといひしは爾雅の土螽蠰谿注似蝗而
小青斑又呼に蚱蜢といふものハタハタといひしも
爾雅の蟿螽螇蚸注似蚸蝑而細長飛翅作
聲者此是其名のまゝ見えず津　イナツキといひては舂黍といふなり
稲を舂くの義に似たれば此はいふなるその稲をつきぬ
るゆゑなるへしコヽロそゝのかしきさまをいひコヽロとハ古の

之イボムシリと云爾雅の疏ニ一名齕肬とし本草
本草ニ謂ゆる蟷蜋の間偶之蝕肬即疣子小肉贅之今
人病肬者往々捕此食之とあれハ此之カマキリと云
ふ爾雅注ニ有臂若斧奮之とみえ此之斧と云
鎌とトし名其似たるより称して鎌之
蝘蜓 トカケ 倭名抄兼名苑釋藥性等ニよし蝘蜓ハ
一名蝾螈一名蜥蜴蝘蜓又本草ニよりて竜子一名守

宮トカゲ蝘蜓ト云常居屋壁故名守宮之と
ほせりトカゲとも同じ名の陰處に棲りといふ
けりしは其説せし所なれと説ま：蜥蜴蠑螈蝘
蜓三物なれトカゲとは各別なり其説せし所は
爾雅によりしとみへ字書にも脱誤ありしを考へ
かの方言の説誤にしてなされ東雅也本草
小野氏も其品物の事は詳に論じし名

の間に生するゆゑに石竜といふ即蜥蜴

又草渓路間に生するゆゑに虵醫といふ也

又井モリ也以此之屋壁間にあるゆゑに蝘蜓

といふ即守宮也名此ヤモリト以此之即とれたと　きそトカゲ

よつて之を名のとし呼之井モリヤモリとて屋壁の間へ

ところなりとふて即守宮の事なり。

蝸牛カタツブリ倭名抄に草として蝸牛をカタツ

ブリ負蠃蝓背負殻也七りあり洋　カタツブリ　といふ角と

又ことふハ此神の名に上世よりて尓以へむな

やホタルとはぬるとくべに稚き蛍火君と云み

しかけしとホタルやとタルを焆テルやテルやしひタル

やしくも勝徳なる人君の葉およホドロと云

およばと称してホドロとはヒカルと云詞之ヒカル也

とホタルやしくさしやさんくし御さ之

蝦蟇カヘル倭名類聚ニ唐韻云々蛙カハル蝦蟇也

蝌斗ハ蝦蟇子之俗ニハ陶隠居本草注ニ云く
蝦蟇大而青脊謂之土鴨ナリアヲカヘル黒色謂
之蛤子ニツチカヘル蛙黽アヲカヘル形小如蝦蟇而青
色者之又兼名苑注ニ云く蟾蜍ヒキ似蝦蟇而
大陸居者也とほせりカヘルといひヒキと云並ふ
詳ならず俗ニ雨蛙カヘルと云るもと多のまれカヘルなりと云
ことも有りゆゑくゝもの鳥の子れカヘルなりといへるしとむは
てもまり蝦蟇の子ならぬ生れりし後其のさしくありて科
斗となり科斗又変して蝦蟇となりぬれハカヘル子とは云

の白頭垣衣一名老翁カブラヲミスト云由注セリ
或人の説にミスと云は田面に見えたるさまにいへるなり但し
催馬楽の歌にはあをやぎをミスとよめるなりカブラヲミス
とは其歌の垣衣根に似たり
そはかいひしなるらし

蛴螬スリモムシ倭名抄に本草にいふ蛴螬スクモムシ
一名蟦蠐とぞ見えたり爾雅にも蛴螬在
糞土中といへり俗に糞土をスクモと云なり故に
其名によりて此名ありなるべし此物芝枝

の変蛻して蟬となるなく

螓 ヒシム 倭名おなじ 唐韻云 螓 ヒシム 胡

生蕃死者之と注せり 義不詳 ヒシとて日孫ずをの新まをも昔

ヨ死しぬ所るよのはに給ひけると

いふ事なる見し

蝶 テフ 字の音なるへし 倭名おなじ 兼名苑と

〻〻 蛺蝶 一名 䗅 蛾似蛾而大白者之と注して

以 胡蝶 緑蝶 紺蝶 並小 和名かはひらことみえ次 蝶

右ホヽテフ是蝶二音の轉年と謂へり
蝶ヲ倭名抄ヲ引テ文ヲ以テ蚕作者之ヒヽルと云ふ
セミとぞ云ひし類蝶之

蟬

セミ 倭名抄爾雅本草等引テ蟬之セミ
蛁蟟 ナセミ 此蟬ノ類者之 馬蜩 ムマセミ 蟬
中最大者也 寒蜩 俗ニカムセミとよぶ 似蟬而小
月令寒蟬鳴是也之 蛁蟟クツクボウシ 八月
鳴者也 茅蜩 ヒクラシ 小青蟬之と混せるセミ

とゝ蝶字の音は牒之ムセとよ其大なるは

いふ之カムセとはこれを一字の音は牒也平聲

ふ詳ボ人の説に十八セとして名を蝶なれと不詳と云之

クツくホウとしは之俗にツクくホウとし云その形状

とありとしいふ之しへ回 蓄形り瞭らかに蓄してといふといふ

明りいふやはるへし

儒名称は尾虫名其義解せられずと為ラ

明り形なとも称せらるゝ所之次

已上虫部

大尾